

〈型〉を襲う物語

——「佐銘川大ぬし由来記」の説話生成——

保坂達雄

はじめに

沖繩に「佐銘川大ぬし由来記」という古文書が残されている。この文書については、これまで第一尚氏王統の発祥をめぐる議論のなかで言及されてきたが、叙述そのものにまで踏み込んだ検討はなされていない。

しかしながら改めて原文に即して読み直してみると、伝承論的に見てきわめて興味深い内容を含んでいる。とくに第二尚氏の始祖尚円王金丸の伝承との話型や説話要素の類似は無視しがたいものがある。第一尚氏の元祖佐銘川大主の伝承は、何故に後代の尚円王の歴史伝承に似かよってくるのか。〈型〉のダイナミズムを議論する上で、格好の材料となりうるのではないか。〈型〉という物語的伝統に基づきながら、その〈型〉に素直に準拠し説話要素をそのまま流用しながら創り上げてゆく。このような説話生成の方法には、いったいどのような力学が働いていたと考えるべきであろうか。

本稿では、類似する話型をもつ他資料と比較検討することによって、この由来記がどのようにして生成されてきたのか、ま

たそこにはどのような伝承生成集団が介在するのか等、この由来記の生成過程について考察する。¹⁾

一 「佐銘川大ぬし由来記」の写本

内容の検討に入る前に、まず写本を簡単に整理する。現在所在が確認できる写本は三本ある。琉球大学図書館伊波普猷文庫蔵本、法政大学沖繩文化研究所蔵本、沖繩国際大学図書館蔵本の三本である。文体の若干の相違、末尾部分に増補された別内容の記事などを除けば、これら三本はほぼ同一の本文といえる。書写時期について、沖繩国際大学本が光緒十七年（明治二十四年）、法政大学本が明治三十三年とする。これに鎌倉芳太郎が昭和二年に転写した同治七年（明治元年）本を加えると、「佐銘川大ぬし由来記」の筆写年代は明治初年から三十年代に集中していることがわかる。また発行者を佐銘川大主の根拠地「佐敷村」「佐敷番所」等とする。おそらく第一尚氏の末裔たちが多く居住する佐敷の地で筆写されたものと考えられる。

それでは原本の成立はいつ頃とすべきか。実はこの文書、前半の内容と後半の内容が大きく食い違っている。前半は、「元

祖由来記」と題されるように佐銘川大主から始まり、その子苗代大比屋（後の尚思紹）、孫に当たる佐敷小按司（後の尚巴志）までの伝承が神話的に叙述される。後半は第一尚氏王統の七代の王名とその未裔たちの履歴が家譜形式によって記述される。最後の与那覇親雲上の履歴が、康熙二十年（一七二〇）で終わっていることから、本書の成立は一七二〇年からほど遠くない、おそらくは一七二五年前後と推定するのが妥当だろう。

二 尚円王金丸と類似する伝承

さて、前半の「元祖由来記」を読むと、どこかで読んだような既視感に誘われる。例えば佐銘川大主に関する叙述などは、第二尚氏王統第一代の尚円王金丸の伝承と瓜二つなのである。馴染みのない文書なので、紹介も兼ねて取って原文を長く引用する。

元祖由来記

一 往昔、佐銘川大ぬし伊平屋伊是名島の住人、佐敷間切江御渡来、大城按司御智二成給ふ由來伝承候得者、幼少の時父母しらすで孤子成給ひは、親類縁者の方預り、養育最早十歳余になれ玉ひは、農業二心掛其働仕給ふに、作色数不豊と云事なし。頓て十四五歳二成けれハ、田を耕んとてあふし筑立けれハ、他人の相耕て有。扱我童子と仰ての仕形ならん。また畦筑立早速耕んと仕給ふに、其夜また他人の耕てケ様の仕形及三四度にけれハ、難黙止。また畦筑立、其夜ふかく忍て見給ふニ、夜半の比牛疋足来あつまりて踏ける。大ぬしはつとかんじ、是天の御助神の御助ならんと手を合、奉拜

し給ふ。難有も初の田よりとしませ、米粟積貯て富貴万福にして、親類縁者所中の人々不自由の方江は、折々見次仕給ふ。依之所中より賈て、大主名立て随ん人ハなし。（中略）

一 島中の者共所存不相達、無言に立帰。巷所に寄合評議仕ける。大ぬし今更米粟過分積置、日々少々宛渡し候付て、諸事働へく様不成、無情次第にして候。逆も多人数押寄奪取配分いたせんと言ければ、人々皆同意仕。若大ぬし及異儀者討果せん。今留守の中に先眷屬擁て格護仕せ。只今呼ひ寄ける。其時大ぬし漁に出て不有合。大ぬし隣所に常式したしくまじわる老人有。此事及早速大ぬしの家行て見れば、人ひとりもなし。寝屋忍入て見れば、春米有。急にわら袋取て入付、又小壺にみそ入付。浜のあた垣中にふかく隠しはやく来りかし。告て何方江打行さんと侍居らる。島中の人々遠目付て多勢押寄せ、積貯たる稲粟取て去りける。むさんやな。大ぬしかくとは不知、其日入相時分漁てかへり玉ひは、老人ひそかに立寄て、耳に付てケ儀之次第告て、何方江も逃去玉ひと云ければ、大主はつと定じ、此世撮何方江行て助命いたせんや。逆も快討死せんと云ければ、老人取隠置たる米みそ渡し玉ひは、大ぬし手を合、早速漕出ける。遠目者共浜におし寄見れば、大ぬしはや逃去ける。

（佐銘川大ぬし由来記）

右は「元祖由来記」の冒頭部分で、佐銘川大主が住民の迫害を受けて生地伊平屋、伊是名島を捨て、沖繩島に避難するくだりである。一方、尚円王金丸の伝承にも佐銘川と見紛うばかりの記述が、以下に挙げるように随所に見受けられる。

成化六年庚寅尚田御即位

尚田公ハ、北夷伊平也嶋、伊是名、首見ノ人也。永楽十三年乙未ニ御誕生。字ハ思徳金トゾ申ケル。

父母ハ素ヨリ、嶋ノ百姓タリ。其先ハ、今ニ不_レ可_レ知ト云ヘドモ、疑クハ先王ノ後胤ニシテ、故有テ彼地ニ渡リ、世々嶋ノ百姓トハ成リヌラン。不然即如何ゾ、俄ニ此大福有ニヤ。
(中略)

尚田公ハ、少ノ時ヨリ、百姓ニ交リ、耕農ヲゾ業トシ給。或時早魘ノ災有テ、田ニ水アルハ無シ。人ハ皆、夜白、水ノツトメラシケレドモ、惟尚田公ハ、其ツトメナシ。サレ共、田ニ水アル事、宛毛雨天ニ不_レ異。人皆聖瑞ヲバ不_レ知シテ、尚田公、水ヲヌスミ給トゾ、申ケル。
(『中山世鑑』卷四)

附記

尚田王金丸、生而有「賢徳」。輔_レ父_ヲ為_レ耕。

宣徳九年甲寅、金丸年二十歳。父母俱喪。時弟宣成五歳。金丸憂苦、以_レ農_ヲ為_レ業。毎_レ遇_レ天旱、民田皆涸。金丸之田、独有「水漫漫」。人皆疑、為_レ盗水。常与_レ金丸「不_レ睡或將_レ害_レ之。金丸無_レ言_レ可_レ弁。

正統三年戊午、歳二十四、竟棄_レ田園。自携_レ妻弟、涉_レ海至_レ于_レ国頭。既居数年。亦如此。金丸尽_レ心待_レ之。終不_レ見_レ容。

(蔡温本『中山世譜』卷六)

67 玉城ヒヤ [俗ニオヤ田ト云也]

金丸王加那志ミラヤ地。今、代々アムガナシ地方ニ被_レ下置_レ。

由緒ハ、金丸王御作毛、年毎ニ純熟シテ他ノ作物ニ異也。或時一年大旱ノ時、下ノ民田ハ水干テ、上ノ御田ハ水減ゼズ。下ノ田主、水ヲヨコシ入_レ置ケルニ、一夜ノウチニ上

ノ御田ニ上リ加リ、下ノ民田水乾ケレバ、田主、御田水滿テ不_レ絶事ヲ怪ミテ、水ヲ渡上ラレタルト心得テ、野心ヲ企奉_レ殺害_レラント巧ミケルヲ、夢ニモ知ラセタマハズ、田ヲ耕シ晩ニ御帰リメサレケル時、誰共不_レ知白髮翁

御門ノ辺ニイ、申ケルハ、御主コソ此地ニ御棲居ハ危キ御事也。早ヤ国頭ノ地方ニ御渡リアレト、急ラ奉_レ告ケレバ、即御渡海ノ思召立ニテ、其御用意アリシヲ、翁申ニ、御糧御用意も入間敷也。一刻も御急ギアレト、浜表へ奉_レ催

クリ舟ニ船具備へ置、青茅ニテ赤飯ノパント三、白米一俵乗置、是御用ひ可_レ有ト、翁ハ則失タマフ。鬼神託ナリト示現ニマカセテ、国頭郡宜名真ト云所ニ御着船有テ、竊ノ

御棲居ニ年月ヲ御送アリケルニ、何事モ御思ノ儘ニ相叶故、且、里人奉_レ憎、害ヲ企ケル処、泊大比屋「馬氏国頭親方正

胤」密ニ奉_レ告知一故、其難ヲ御遁レンガタメ首里へ御幸有リタルト、古老者申伝也。
(『琉球国由来記』卷十六)

『中山世鑑』、蔡温本『中山世譜』、『琉球国由来記』から引用したが、これらを先の「佐銘川大ぬし由来記」の記述と比較すると、以下四点で両伝承が著しく類似していることがわかるだろう。

- 1、伊平屋伊是名島の出身——佐銘川は幼少時孤児。金丸は百姓の子で、父母に死別。(該当箇所を……で指示)
- 2、農耕に神の助けがある——佐銘川の田では牛が深夜に田

起こしなどを手伝い、金丸の田では早魃の際にも水が満ちている。(該当箇所を——で指示)

3、島民たちに妬まれる——島人らは佐銘川貯蔵の米粟奪取と殺害を計画。金丸もまた殺害を計画される。(該当箇所を——で指示)

4、翁の指示と助けにより島外に脱出する——佐銘川は今帰仁へ。金丸は国頭宜名真へ脱出。(該当箇所を——で指示)

なぜこのように重複するような伝承が双方の叙述に見出されるのだろうか。佐銘川大主は第一尚氏の元祖であり、片や金丸も第二尚氏第一代国王である。ともに始祖であるという共通性が偶然にも類似した伝承を生成させてしまったのだろうか。佐銘川大主伝承と金丸伝承のどちらが先かはもちろん議論の余地はある。金丸伝承が成立年代の早い『世鑑』の方に先に記載されていることを踏まえると、大主が伊是名島から沖繩島に逃れてきたとする伝承は、金丸伝承よりも後の物語と考える方が自然だろう。

口頭伝承の世界では、物語の型を踏襲するだけでなく、細部までも真似て近似した物語を紡ぎ出してゆくことがしばしば起こりやすい。第一尚氏の元祖佐銘川大主の伝承を語ってゆくためには、歴史伝承として權威のある第二尚氏王統の始祖たる尚円王金丸の伝承に重ね合わせなければ語りとして成り立ち得なかった。そういうことがあったのではなからうか。

三 説話要素の一致

第一尚氏王統の元祖佐銘川大主の伝承が他の伝承をいかに襲

いながら生成されたか見てきたが、こうした襲用は前述のような話型ばかりではなく、説話要素にまで及んでいる。

次に紹介するのは、前掲の写本とは異なり、鎌倉芳太郎が昭和二一五年頃に伊是名島で土地の人から直接聴取した「サメ川ウフヌシ伝説」である。口頭で伝承されてきたものの要約であるが、前掲の写本とは内容を異にするところがあり、「佐銘川大ぬし由来記」の異本に基づく口頭伝承とおぼしいものである³。これまた長くなるが、全文を引用する。

○サメ川ウフヌシ伝説(伊是名村ニテ聴取)

1. サメ川ウフヌシノ元祖ハ田名ニ信ミタリ。
2. 田名ヨリ我喜屋ニ来リテ次第ニ富ヲナシハ倉ヲ立テ、盛大トナレリ。

コノ時伊是名島ハ八倉ノ次男ヲ毎年交替テ遣シ統治シタリ。

3. サメカワウフヌシハ八倉ヨリ遣ハサレテ伊是名島ニ至リタリシガ一年ニテハ婦ラズコ、ニ止マリ且今婦仁及首里ト交通シテ次第ニ富ミ盛ヘ後ジラ凌ゲニ至レリ。

4. 八倉ヨリハサメカワウフ減サント計リ首見ノ民ヲセン動シテ大旱ノ時ニ米一合ヅ、ヨリ以上与ヘザルヲ怒ラシメ遂ニ殺サント思フニ至ラシメタリ。

5. 老翁ノ告ニヨリ食糧ヲ貰ヒテ伊平屋ヲ出テ今婦仁逃レタリ。

6. コ、ニテ毎日舟ニノリ魚ヲ釣リテ住ミタリシガ常ニ従僕一人ヲツレテ沖ニ出テ足ノオヤ指ニ糸ヲマキツケ昼寝シツ、釣リタリシニ或日大フカ出テサメ川ノ足ヲ

食ントセリ從僕驚キテサメカワノ常ニ帶セル刀ヲフリ
上ゲシニ大フカハ又海ニ入ルカクスルコト数度ニ及ビ
シカバ從僕ハコノ刀ハ威力アルヲ思ヒ遂ニサメ川ヲ殺
シテコレヲ奪ハント思ヒ居タリ或時コレヲ他人ノ人ヨ
リサメ川キ、又コノ難ヲ逃レテ奥間ニ行キタリ、

7. 更ニ国頭辺戸ニ渡リタリシガ又徳高キニヨリ難ヲウケ
海岸ヲ巡リテ勝連半島ヲ過ギ佐敷ニ行キタリ、

8. 佐敷按司ノ智トナレリ又一説ニ座喜味按司ノムコトナ
レリト云フ、

異説

1. 今婦仁城滅亡ノ時ニ木箱三ツニ子供ヲ入レテ沖ニ流シ
タルニ伊江島ニ到着シ更ニコレヨリ伊是名島ニ来レリ
コノ子供生長シテサメ川ウフヌシトナレリ、

2. 今婦城ヨリ箱ニ入レテ流シタルニ直チニ伊是名島ニ到
着シコレヨリサメ川ウフヌシ成長シタリトナスアリ、

この要約では佐銘川大主をさらに遡り、その元祖は伊平屋島
田名に住み、そこから我喜屋に移り八倉を建てたとする。伊是
名島を任された八倉の子のサメカワはそこで富を成し、伊平屋
島の本家八倉を凌ぐほどになる。そのため島民から迫害を受け
沖繩島今帰仁に難を逃れる。このように語られるところがこれ
までの写本にないところであるが、その後の展開は写本とまっ
たく同じである。問題はその後の叙述であろう。以下の三点で
他の伝承と酷似するのである。

5. 魚釣りの説話——大フカと大鰐（大魚）の相違はある
が、刀剣で撃退する点で尚巴志の歴史伝承と一致。（該

当個所を——で指示）

6. 難を逃れていった先の奥間——宜名真からさらに逃げ
奥間の東鍛冶屋に助けられた金丸伝承と一致。（該当
個所を……で指示）

7. サメカワも金丸も箱に入れて流される（該当個所
を……で指示）

まず5の魚釣りの説話では、サメカワは「大フカ」に襲われる
が、從僕が佐銘川が帯にしていた刀を振り上げて撃退する。とこ
ろが、このサメカワの孫に当たる第一尚氏第二代尚巴志の伝承に
もこれと類似する叙述が、以下のように見受けられるのである。

巴志、生得身体極小、長不滿五尺。故俗、皆呼_レ佐敷小按司。
其幼年、嘗遊_二于与那原_一。令_二鉄匠造_レ劍。匠人急造_二
農器_一、造_レ劍甚遲。

巴志屢往問求、匠人佯為_二造劍之狀_一。巴志還則止。漸
漸鍛鍊、三年而後成。

巴志得_二此劍_一、一日駕_レ舟遊。忽然大鰐、翻_レ浪躍來。舟
幾覆沉。巴志按_レ劍而立。鰐魚畏退、不_二敢侵_一。

（蔡温本『中山世譜』卷四、尚巴志王「附記」）

……小按司持此劍、乗船遊戲。偶海中之大魚飄來、將吞
小按司、見其所持之劍、畏不敢侵。

（蔡鐸本『中山世譜』卷三、尚巴志王「附記」）

蔡温本『中山世譜』では、大鰐に襲われかかった尚巴志は劍を
立てて鰐を撃退したとある。また次の蔡鐸本『中山世譜』でも同
様に大魚を撃退する。フカと大鰐（大魚）の相違、また佐銘川で

は従僕に剣を奪われそうになる話へと展開するなどの相違点はあるが、魚釣りで襲いかかったサメや鰐を刀剣で撃退するという説話要素の一致は偶然とは思えないのである。蔡鑄本は一七〇一年、蔡温本は一七二五年に編修されたものである。一方、伊是名島で採集されたサメカワに関する口頭伝承が、いつ頃成立の「佐銘川大ぬし由来記」に基づく口頭伝承なのか俄かには判断しがたいが、おそらくは正史『中山世譜』に記述された尚巴志の記事を参照して生成されたと考えるのが自然ではなからうか。

6の避難先を国頭の奥間とする点でも共通する。サメカワ伝承ではただ単に奥間に逃れたとするばかりだが、左に掲げる『沖繩県国頭郡志』にあるように金丸は伊平屋島から宜名真に渡り、そこからさらに逃れて奥間鍛冶屋に助けられる話が詳述される。

昔頭門貴族首里より隠遁して国頭間切辺戸村に下り土豪佐久真方に寄寓し、後同家の愛娘との間に、男子を挙げ、此に於て村民の協議により其子を箱に封じて海に投ず。伊平屋島の漁夫或日海浜に在りて洋中を望むに何物が波の間に漂ひ来るを認む。取りて検すれば王の如き男子箱の中に在り。漁夫喜ぶこと限りなく直に吾家に抱き帰り、赤子を失ひて悲嘆にかき暮れ居たりし吾妻に示し是れ天の賜ふ所なり宜しく養育すべしとて渡しぬ。之より金丸と命名し実子の如く愛撫せり。或年大旱あり水田皆枯渴するに独り金丸の田のみ水満々たりしかば村人之を妬みて迫害すること甚だしかりき。金丸夜陰扁舟に乗じて宜名真に渡り、此に居れり。然るに此地にても亦土民の誤解を招き大事出来せんとせり。時に奥間鍛冶屋なる者あり馬廻り(飛脚)を勤

め回文送達中偶々金丸に遇ひて其危難を告げ、与那覇岳山中インツキ屋取に隠れしめ、猪狩にかこつけて食料品を運び而して金丸を庇護せり。(下略) (国頭村奥間)

昔球陽諸郡戦乱時代尚円の父討死せしに依り一子(金丸)を箱に入れて海中に投ぜり。箱は漂流して伊平屋島に至り瀧夫の発見する所となる。(下略) (久志村汀間)

7についても、サメカワウフヌシは今帰仁城滅亡のおり木箱に入れて流されたとする異説を伝えているが、金丸もまた父討ち死のため、箱に入れて海中に投じられたという口碑が国頭村奥間と久志村汀間で伝えられている。すでに『世鑑』にあつたように、正史では金丸は「父母ハ素ヨリ、嶋ノ百姓タリ」とされていたのに、なぜこのような口碑が語り伝えられたのであろう。サメカワも金丸も、戦乱のさなか木箱に入れられて流され、伊平屋島に漂着するとする共通した伝承となつているのである。こうした伝承は、神話類型ではうつつは舟漂着型と呼ばれるもので、異界から寄り来る神の子を語る伝承である。このような伝承は始祖伝承にこそふさわしい。第一尚氏王統の元祖たる佐銘川大主や第二尚氏王統の高祖尚円王はともに始祖とする点の共通性をもつ。この二人を語るのうつつは舟漂着型が用いられたのは、始祖伝承に最適の話型と考えられたからだと考えられるのである。

おわりに

佐銘川大主の伝承と他の資料との関係を見てみたが、なぜ前述のように特に尚円王金丸と重複する伝承が伝えられているの

であろうか。一つには二人がともに始祖の立場に位置するといふことが挙げられる。始祖には始祖にふさわしい伝承が纏わりつく。木箱に入れられて流され伊平屋に漂着したとする口碑などはそうした伝承として納得することができよう。しかしながら、これまで指摘した七つの共通点が、これですべて説明できるとは必ずしもない。考慮しなければならぬのは、佐銘川大主に始まる第一尚氏は、わずか四十年にして滅んでしまった王統だったという冷酷な歴史事実についてである。

佐銘川大主に始まる第一尚氏三代の物語には、滅亡後それぞれの末裔たちの間で語り伝えられていた伝承があり、そうした伝承を一つの物語として統一して纏め上げたのが、この「佐銘川大ぬし由来記」だったのではないか。そこでは尚円王金丸や尚巴志の伝承の型が踏まえられていた。金丸といえば、他ならぬ第二尚氏王統の高祖となった尚円王である。同じ尚氏を名乗りながら血族的にはまったく連続しないばかりか、一族を滅ぼし陵墓までも焼き討ちにした張本人である。その尚円王金丸の歴史伝承を襲うことでしかみずからの元祖の伝承を語り得なかつたとは、なんと哀しいことではないか。にも関わらず、そうせざるをえなかつた。第一尚氏の末裔たちがみずからの歴史を掘り起こして語ろうとするとき、現王統の始祖の物語を語りの枠組みとして踏襲することではしか物語を生成しえなかつた。

十七世紀の中葉、琉球では王府によって正史『中山世鑑』が編集されたことに連動して、各士族の家々でも家譜作成の機運が高まったと見られる。論証は省くが、おそらく「佐銘川大ぬし由来記」もこの家譜編纂の動きのなかから生み出されたので

はなかつたか。もちろん「元祖由来記」の異常な長さは家譜序の様式にはまったく収まりきらないほどのものであり、したがって「佐銘川大ぬし由来記」は明らかに王府に提出した家譜そのものではない。しかしながら、そこには末裔たちの一族の喪われた過去への歴史生成の意思が強く作用している。写本が佐敷村に限られて伝えられてきたことが、そのことを物語っているだろう。佐敷は第一尚氏発祥の地であり、末裔たちの本拠地でもあったのである。

第二尚氏によってわずか四十年で滅ぼされてしまった第一尚氏。その末裔たちの元祖への想いが、家譜作成を契機にして王統一族の物語を纏め上げさせようとした。「佐銘川大ぬし由来記」はこのような背景の中から誕生したと考えられるのである。

注(1) 本稿に関連する論文として次の三編がある。併読を乞う。

- 「琉球国王の出自をめぐる歴史伝承——第一尚氏王統の発祥を中心にして——」(『東京都市大学人間科学部紀要』第二号 二〇一一年三月)
- 「佐銘川大ぬし由来記」の伝承世界」(『日本口承文芸研究』第三十六号 二〇一二年三月 日本口承文芸学会)
- 「場天ノ口から聞得大君へ、あるいはテダシロからツキシロへ」(『東京都市大学人間科学部紀要』第三号 二〇一二年三月)

(2) 沖縄県立芸術大学附属研究所編『鎌倉芳太郎資料集(ノ一)

ト篇) 第二巻 民俗・宗教」(二〇〇六年三月) 四三頁

(3) 伊波普猷も「あまみや考」(昭和十一年八月稿、『日本文化の南漸』昭和十四年十月 楽浪書院)の中で異本に基づ

いた記述をしている。おそらく両方の由来記を参照していたのであろう。

(4) 国頭郡教育部会編『沖縄県国頭郡志』(一九一九年七月、第三版 一九六七年十一月 沖縄出版会 三二六―七頁)

*本文中に引用した「佐銘川大ぬし由来記」は、沖縄県立芸術大学附属研究所編『鎌倉芳太郎資料集(ノート篇) 第二卷 民俗・宗教』(二〇〇六年三月)、『中山世鑑』・蔡温本、『中山世譜』は横山重編『琉球史料叢書』(一九四〇)―四一年。全五卷 一九七二年四月 東京美術)、『蔡鐸本』・中山世譜』は『蔡鐸本中山世譜』(一九七三年三月 沖縄県教育委員会)、『琉球国由来記』は外間守善・波照間永吉編『定本 琉球国由来記』(一九九七年四月 角川書店)に拠った。